想いの行方

沢井 紗矢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
想いの行方

【Ｎコード】
Ｎ４８３７ＢＡ

【作者名】
沢井　紗矢

【あらすじ】
須藤遥香　２６才

夫の須藤一樹とは、初めての結婚記念日を迎えたばかり。
優しく頼りがいのある夫と幸せな毎日を送っていた。
そんな毎日も夫の浮気を知った事で崩れさってしまう。

信じていた夫の不倫。
その相手は……。

一人寝の夜

夕食後、須藤遥香は片付けをしていた手を止めて、リビングで寛ぐ夫の一樹に目を向けた。

均整のとれた身体を、ソファーに深く沈めた一樹の姿に胸がときめく。

社内恋愛期間も合わせれば、３年以上一緒にいるけれど、遥香は出会った頃と変わらない気持ちで一樹に恋していた。

遥香と一樹は、大手不動産会社の同期入社として知り合った。

その年の新入社員２０名の中で、一樹は能力、学歴共に群を抜いて優秀だった。

それに加え、男らしい容姿と社交的な性格で、社内の女性達の憧れの存在だった。

遥香も、出会ってすぐに一樹のことを好きになったけれど、なかなか気持ちを打ち明ける事は出来なくて、親しい同期として、接する事しか出来ないでいた。

だから思いがけなく、一樹に好きだと告白された時は、自分でも信じられない思いだった。

本当に、嬉しくて仕方なかった。「どうした？」

視線に気付いた一樹が、見ていたテレビから遥香に目線を移す。

整った顔にじっと見つめられ、遥香は顔が赤くなるのを感じ、慌てて視線を反らした。

「あの……コーヒーいるかな？と思って」

「ああ、頼む」

一樹は、そんな遥香の態度に不思議そうな顔をしながらも頷いた。遥香はお揃いのマグカップにコーヒーを注ぎながら、気持ちの高まりを感じていた。

久しぶりに夫との時間を持てた幸せを噛みしめる。

一樹は2ヶ月前、会社の人事異動で営業部に配属になっていた。

新しい部署で、引き継ぎをしながらの仕事は忙しく、連日深夜帰宅が続いていた。

たまに早く帰って来た日も、疲れているからと早くに自室に入ってしまうので、同じ家に住んでいながら会話もままならないような生活だった。

遥香は、入れたてのコーヒーをソファーの前にあるローテーブルまで運んだ。

「仕事は落ち着いてきたの？」

自分もその場に座り込み、カップを手にしながら、一樹に問いかける。

「いや、まだ当分忙しい」

一樹も湯気の立ったコーヒーを、ブラックのまま口にした。

「そうなんだ…大変なんだね」

気持ちが沈んでいくのを感じながら、相槌をうった。

元々同僚だった為、営業部の仕事が忙しい事は理解している。

仕事なんだから、わがままは言えない。

そう思いながらも、連日1人での夕食はとても寂しものだった。（早く仕事が落ち着いてくれればいいのに…）

口には出さないけれど、いつもそう考えてしまっていた。

「遥香？」

一樹の怪訝そうな声が聞こえて来て、遥香はハッとして顔を上げて言った。

「今日は早く帰ってきてくれて良かった。金曜日だから接待があると思ってたから……二人でゆっくりできるの久しぶりだよね」

「ああ、最近は休みも無かったからな」

一樹は小さなため息を吐き、その様子に遥香は心配そうに眉をひそめた。

「大丈夫？マッサージでもしようか？」

「大丈夫だよ」

疲れた顔に小さく笑みを浮かべる一樹を見ていると、切ない気持ちが込み上げて来た。

「明日も仕事だし、そろそろ休むか」

言いながら一樹はソファーから腰を上げた。

「明日も仕事なの？　土曜日なのに……」

「仕事が溜まっていて今週も休日出勤だ。帰りはかなり遅くなると思うから、遥香は先に寝ててな」

そう言うと、玄関の側にある自分の部屋へ向かおうとした。

遥香達の住むこのマンションには、結婚した時に引っ越してきた。
都内を走る私鉄の駅から、徒歩で１０分程の高台にあり、新築で間取りが２ＬＤＫ有る。
新居を探して、物件巡りをしていた二人は、一目で気に入り、すぐに契約をした。
一樹が、それぞれ個室をもとうと提案してきたのはその時だった。
「それじゃあ、ただの同居人みたい……」
気の進まない遥香の言葉に、
「夫婦でもプライベートな空間は必要だと思う。もちろんお互いの部屋へは自由に入っていいし、隠し事をしようとも思ってない。ただ俺は仕事を持ちかえる事も多いし、１人で集中出来る環境が必要だ」
一樹はそう説得し、最終的には遥香も納得した。納得はしたけれど、どうしても、時々寂しい気持ちになってしまう。
特に今日は……。
「ねえ一樹、今日は一樹の部屋で寝てもいい？」
遥香の言葉に一樹は少し驚いたような顔をし、それから困ったような表情になった。
「ごめん、明日早いんだ。今日はゆっくり休みたい」

「あっ、そうだよね！　ごめんなさい、疲れてるのに」

一樹に拒否された事に少し傷つきながらも、遥香は無理に笑顔を作った。

「いや……じゃあもう寝るから、おやすみ」

一樹は、遥香に背を向けて自室の扉を開け、振り向くことなく入って行った。

「おやすみなさい……」

閉じられた扉を見ながら、遥香は深いため息をついた。

（もう少し一樹と話したかった、一緒にいたかった）

仕事が忙しくなってから、同じベッドで眠る事もなくなっていた。

一緒にいる時間が減ったせいか、一樹との間に距離が出来たような気すらする。

（寂しいよ、一樹）

遥香は、声に出せなかった想いを心の中でつぶやいた。

夫の嘘

日曜日の午後。

遥香は、実家の近くにある大型ショッピングセンターを訪れていた。

来月出産予定の友人へのお祝いの品を買い、その後、久しぶりに実家に寄る予定でいた。

ベビー用品店やインテリア用品店を悩みながら見て回り、結局無難にブランドの洋服と小物を買った。

その後、洋服やアクセサリーの店に何件か寄り、最後に本屋の雑誌のコーナーに向おうとしている時に声をかけられた。

「遥香？」

名前を呼ばれ、振り返った先にはよく知っている顔があった。

色素の薄い、髪と肌。

長めの前髪の間から、切れ長の涼しい目が遥香を見つめていた。

「諒！　どうしてここに？」

驚く遥香に、諒は呆れたような顔をした。

「それこっちのセリフ。お前こそ何してんの？」

「私は買い物のついでに実家に寄ろうと思って」

言いながら、手に持ったブランドのロゴ入り紙袋を諒の前に出して見せた。

遥香と久賀諒は、同じ地元で同じ中学校に通う同級生だった。

クラスが一緒だったこともあり、それなりに親しくしていたけれど、高校が別になり、いつの間にか交流が無くなっていた。

遥香が諒と再会したのは、２人が偶然にも同じ会社に入社したからだった。

同じ年の二人だけれど、短大卒業の遥香の方が、入社は二年早かった。

総務部で新入社員の名簿の管理をしていた遥香は、諒の名前を発見した瞬間、驚き目を丸くした。

そして、すぐに諒の配属先である設計部に行き、諒をもっと驚かせたものだった。

諒は愛想の無い性格のせいか、あまり同僚と親しくすることは無かったけれど、遥香とは昔馴染みな事もあってか、気安く話すことが多かった。

「久しぶりだね、私が会社辞めて以来だから一年ぶりかな。元気だった？」

遥香は、久々の再会に笑顔を浮かべながら言った。

「実家でなんかあったのか？」

相変わらず素っ気ない諒に、遥香は苦笑いをしながら答える。

「別に何もないよ、最近寄ってなかったから、買い物ついでに顔出すだけ」

その言葉に、諒は怪訝そうな顔をした。

「じゃあ須藤さん1人で行ってるのか？」

「え？」

「恒例のバーベキュー。お前が行かないなんて珍しいな」

「え……バーベキューって……私、聞いてない」

遥香の顔が一気に曇った。毎年恒例のバーベキュー大会。

会社の親睦会費を使って、年に一度大々的に行われていた。

社員だけでなく、その家族も参加可能で遥香はそれを毎年楽しみにしていた。

（……どうして一樹は教えてくれなかったんだろう）

考え込み、視線を下げていた遥香は、

「もう買い物終わった？」

諒の声に顔を上げ頷いた。

二人でショッピングセンターを出て、初夏の強い日差しの中、家迄の道を歩いて行く。

「そんなにバーベキュー行きたかったわけ？」

すっかり沈んだ様子の遥香を横目で見ながら、諒が言った。

「行きたかったよ。楽しみにしてたし」

「ふーん、俺は面倒としか思えないけど」

諒は興味無さげに言う。

「一樹は、どうして言ってくれなかったのかな……」

遥香は、呟きに近い小さな声を出した。

「須藤さんは、今日どうしてんの？」

「仕事に行くって言って、朝早くから出かけたの。最近忙しいみたい」

「ならどっちにしろ行けなかったんだし、いいんじゃねえの？　どうせ須藤さん抜きじゃ参加出来ないんだし」

遥香は、不満そうに眉をよせて諒を見た。「そうだけど、言ってくれなかった事が気になるの。昨日は早く帰ってきたから話をする時間はあったのに」

「行けないのにわざわざ話して、がっかりさせる事ないと思ったんじゃねえの？」

（そうなのかな……仕事が無ければ言ってくれた？）

遥香は、隣を汗ひとつかかずに歩く諒を横目で見た。

まるで諒の回りにだけ、冷たい空気が流れているようだった。

「ねえ……一樹の仕事が忙しいのっていつまで続くのかな？」

「さあ、俺に聞くなよ」

「だって同じ会社だから、少しは分かるでしょ？」

「知らない。そんな事本人に聞けよ」

冷たくも感じる諒の素っ気ない態度に、遥香はうつむく。

「聞いたけど、当分忙しいって……」

「じゃあ、そうなんだろ？」

諒は、浮かない顔をしている遥香に視線を向けた。

「……須藤さんの仕事が忙しいと何か問題でもあるのか？」

「問題なんて無いけど、でも最近ずっと帰りも遅いし、ろくに話も出来ないし、夕御飯も毎日1人で少し寂しい……」

悲しそうな顔をして遥香は言う。「須藤さんにそう言えば、少しは早く帰ってくるんじゃねえ？」

「言えないよ。一樹は遊んでる訳じゃないんだし」

「それでもお前の気持ちは伝えていいんじゃねえの？　須藤さんはお前の夫だろ。思ってる事はちゃんと言えよ」

諒は淡々と言いながら、立ち止まり遥香に体を向けた。

「じゃあ、俺こっちだから」

遥香の実家と、反対の方向を指差した。

「あっ……そうだね。ごめんね、久しぶりに会ったのに私の話ばかりして」

「別にいいけど」

いつもの事だろと、諒は無表情でボソッと言うと、その場を去っていった。

素っ気ないけれど、諒は遥香の話を真剣に聞き、ちゃんと考えて返事をしてくれる。

そして、それはいつも的確だった。

（諒の言うとおり、一樹に話してみようかな）

そう思いながら、遥香は実家へ続く道へ足を向けた。「お帰りなさい」

深夜1時過ぎ。

遥香は、静かに玄関を開けながら入ってきた一樹を出迎えた。

「起きてたのか？　先に寝てろって言っただろ」

「あ……ごめんなさい。ちょっと話があったから」

一樹の言葉に苛立ちが含まれてるのを感じ、遥香は反射的に謝ってしまう。そんな遥香を見て、

「いや……起きて待ってられるとプレッシャーに感じるから、俺の事は待ってなくていいからな」

一樹は、さっきより柔らかな口調で言った。

「分かった。でも今日は聞きたい事があって」

「聞きたい事？」

一樹は冷蔵庫のミネラルウォーターを取出しながら、横目で遥香を見た。「今日恒例のバーベキューだったんでしょ？」

「え？」

遥香の言葉に、一樹は驚いたような声をあげた。

「今日、実家に帰った時に偶然、設計部の久賀君に会ったの。その時に聞いたんだけど……」

そう言うと、一樹は眉間にシワを寄せた険しい表情になった。

「一樹？」

不安になり呼びかけると、一樹は視線を逸らしながら言った。

「そういえば今日だったな。仕事で行けないと思ってたから、すっかり忘れてた……それより久賀とは食事にでも行ったのか？」

「え？　行ってないよ。少し話はしたけど、すぐに別れたし。相変わらず素っ気なかったしね」

一樹は少し考え込んでから、バツが悪そうな顔をした。

「ごめんな、同期とも再会出来るって楽しみにしてたのにな」

「ううん、仕事が優先なのは当然だよ。ただ一樹が言ってくれなかったのが気になっただけなの」

それに……と続けて遥香は視線を落とす。「最近、全然話が出来なかったから……一樹と話したかったの」

遥香は、一樹が近づいてくる気配を感じながら言った。

一樹は遥香の頭にそっと腕を伸ばすと、

「ごめんな」

と囁き優しく髪を撫でた。

「遥香に随分寂しい思いさせちゃったな」

頭上から響く心地よい低い声に顔を上げると、優しく微笑む一樹の顔があった。

「今日、一緒に寝ようか……」

その言葉に、遥香の胸に喜びが広がっていく。

さっきまで感じていた、漠然とした不安は、消え去っていた。

翌朝一樹の腕の中で目覚めた遥香は、幸せそうに微笑みながら、仕事へ行く一樹の背中を見送った。一樹の勤める、ＮＡ開発は、東京の大手町にある。

自宅の最寄駅から乗り替え無しで、４０分程。

朝のラッシュだと、更に時間がかかり、座れる訳もない通勤電車の中は、かなり体力を消耗する。

一樹は寝不足のせいもあり、いつも以上に疲れた体で地上への階段を上がる。

長く地下鉄に乗っていたせいか、朝の光が溢れる外に出ると解放感でいっぱいになった。

初夏の強い日差しを防ぐ、日傘をさす女性達を追い越しながら歩いていると、前方にゆっくりと歩く見知った人物を見つけ、一樹は顔をしかめた。

「久賀」

追い付き、隣に並び声をかける。「須藤さん……おはようございます」

一樹に気付き、諒が小さく頭を下げる。

一樹と諒は、年も入社年度も所属部署も違っていて、接点があまり無い。

お互い、遥香から話を聞いているくらいで、ほとんど交流がなかった。

「昨日、遥香に会ったんだって？」

めったに話す事のない一樹に声をかけられ、諒は一瞬怪訝そうな顔をしたけれど、

「はい」

すぐにいつもの無表情になり答えた。

「遥香にバーベキューの事、話したんだってな」

一樹は諒にあわせて、歩く速度を落としながら言葉を続ける。

「今度、偶然会う事があっても、会社の事は言わないでくれないか」

「……なんでですか？」

諒は、一樹を横目でチラッと見ながら言う。

「こっちもいろいろとあるんだ、とにかく余計な事は言うなよ」

「……」

一樹は鋭い目を諒に向けた後、諒を置いて足早にその場を去って行った。

疑惑

7月の中旬。

ベランダで洗濯物を干し終わった遥香は、急いで部屋へ戻り窓を閉めた。

朝から気温は上がり続け、少し外にいただけで、背中は汗でいっぱいになる。

遥香はアイスティーを入れると、ソファーに座り一息ついた。

エアコンの効いた部屋で冷たい飲み物を飲んでいると、体に籠もった熱はすぐにひいていった。

遥香は、涼しげな色合いのグラスを見つめながら、憂鬱そうにため息をついた。

あのバーベキューの日から、もう少しで1ヶ月になろうとしていた。

一樹の仕事は相変わらず忙しく、連日の深夜帰宅が続き、あの日以来一緒に過ごせる夜は、一度も無かった。

これ程忙しく、仕事が続くと、一樹の体を心配する気持ちが日に日に大きくなっていった。

だから一樹の様子を見たくて、嫌がられるのはわかっていたけれど、深夜まで起きて帰りを待っていることにした。

もし体調が悪いようなら、病院に行くように勧めないと……一樹は自分ではなかなか行かないから。

そう思い、いつもより注意深く一樹の様子を見ていて……そして、気付いてしまった。

一樹は浮気しているのかもしれないと。確証があるわけでは無かったし、一樹の態度が激変したわけではなかった。

けれども、わずかな違和感が積み重なっていくと、

（本当に仕事なの？）

遥香の心に、そんな思いが生まれて来た。

何度も一樹に聞こうと思い、でも結局何も聞けなかった。

証拠があるわけじゃないから、はぐらかされるかもしれない。

それ以上に一番怖いのは、一樹が浮気を認めた場合だった。

（そんなの、絶対に嫌……）

一樹の口から、他の女性の話を聞くなんて耐えられなかった。

焦りにも似た不安を抱えながら、それでも一樹に聞く勇気も持てず、時間だけが過ぎていき……そして今日、ついに証拠ともいえる物を目にしてしまった。

クリーニングに出そうとまとめていた、ワイシャツの胸ポケットから、それは出てきた。

血のように深い赤の石がついた、小さなピアス。

ローテーブルの上に置いたそれを眺めていると、見つけた時の衝撃が蘇って来るように、心臓がドクンドクンと激しく波打った。（どうして胸ポケットにピアスが？）

いくら考えても、２つの理由しか思いつかなかった。

ひとつは偶然入ってしまったという事。

……でもそれだと、ピアスの持ち主は、一樹にほとんど密着する位の距離まで近づいた事になる。

二つ目めに思いついたのは、ピアスの持ち主が遥香に自分の存在を知らせる為、故意に入れたという事。

どちらにしても、遥香にとっては最悪だという事に変わり無い。

浮気なんて思い込みかもしれない。

ピアスだって会社の女の子のもので預かってるだけかもしれない。

そうやって良く考えようとしても、すぐに思考は悪い方へと向かって行き、一樹が浮気しているのは、もう間違いない事としか思えなくなっていた。

そして、ピアスは故意に入れられたに違いない。

根拠は無いけれど、そう確信していた。日付が変わる頃。
遥香と一樹は、リビングのローテーブルを挟んで向かい合っていた。
テーブルの上には、赤い石のピアス。

遥香は一樹が帰宅すると、すぐに話を切り出した。
真実を知るのは怖いけれど、一樹への不信はどんどん膨らんでいき、
黙っている事が出来なくなった。

一樹は黙り込み、ピアスを凝視している。
何を思ってるのか、表情からは読み取れない。
遥香は一樹の言葉を待っていたけれど、沈黙に耐えられなくなり、
口を開いた。
「一樹、このピアスの人と浮気してるの？　仕事って言うのは……
嘘だったの？」
感情的にならないように、抑えた声を出す。
一樹は深い息を吐いてから遥香を見ると頷き、
「悪かった」

そう言いながら頭を下げた。一樹の言葉に、遥香は大きなショックを受け、黙り込んでしまう。

覚悟はしていたはずなのに、現実に一樹の口から出た肯定の言葉に、胸に突き刺ささるような衝撃が襲って来る。

一樹は、視線を落としたまま話し続ける。

「仕事が忙しいのは嘘じゃない。でもそのピアスの持ち主とは、何回か会った」

「……」

遥香は膝の上に置いた手を強く握りしめ、俯いた。

「遥香、悪かった……」

正面の一樹が頭を下げるのが気配で分かる。

「……どうして浮気なんてしたの？　私の事が嫌になったの？」

「遥香は何も悪くない、ただ間が差しただけだ……悪かった、もうこんな事二度としない」

遥香は、涙の滲んだ目で一樹を見つめる。

「相手は誰なの？」

「接待で使っていた店の子だ、でももう会わないから」

「でも……仕事で使ってるのなら、そのお店にまた行くんでしょう

！」

感情的になってはいけないと思っているのに、抑えられない。

頭の中は、悲しみと怒りと嫉妬心でいっぱいだった。

「その店はもう使わない、約束する」

「相手の子はそれで納得するの？……このピアスはその子がわざと入れたんじゃないの？」

一樹は驚いたように目を見開く。

「彼女はそんな事はしない、これが入ったのは偶然だよ」

「もし別れたくないって言われたら、どうするの？　それでも、もう会わないって言える？」

遥香の瞳から涙がこぼれ、頬を伝っていった。「ああ、何を言われても、もう会わない。本当だ、約束する」

遥香は止まらない涙を手でぬぐう。

一樹はそんな遥香に近づき、そっと肩に手を回して自分の方へ引き寄せた。

「遥香、本当にごめん。もう二度としないから……」

反射的にびくっとする遥香を優しく抱き締める一樹の声は、いつもの自信に溢れた力強さはなく、震えていた。

遥香は腕の中で目を閉じた。

いくら謝られても、今回の事を無かった事には出来ないと思った。

一樹が思っている以上に、遥香はショックを受け、深く傷ついていた。それでも、

（離れられない）

一樹を好きだという気持ちの方が大きかった。

遥香は一樹の広い背中に腕を回した。

一樹はそれに応えるように、遥香を抱きしめる腕に力を込める。

その夜、遥香は朝まで一樹の腕の中にいた。翌日から、一樹の様子が変わってきた。

遥香に対する態度が優しくなった。

帰宅時間も早くなり、仕事で遅くなる時はまめに連絡をくれたりと、気を使ってるのが伝わってきた。

遥香も一樹が居心地良く過ごせるように、家の中を今迄以上に綺麗に掃除したり、料理も栄養に気を使ったものを工夫して作った。

浮気が発覚する以前より、夫婦仲はうまくいっているように見えた。

けれど……。

【ごめん。急に接待が入った。なるべく早く帰るようにするから】

遥香は一樹からのメールに、ため息をついた。

どうしようもなく落ちつかなく、不安な気持ちが膨らんでいく。

（本当は仕事じゃないんじゃ……彼女とは本当に別れてるの？）

いくら連絡をくれても、すぐに疑いの気持ちを持ってしまう。

以前のように、一樹の言葉を素直に信じる事が出来なくなっていた。

再び

「明日京都に出張なんだ、遅くまで予定が入ってるから一泊して来る」

「……え？」

夕食の席での一樹の言葉に、遥香は箸を止め、顔を強ばらせた。

「……泊まらないとダメなの？」

「ああ、部長に同行するから俺一人帰る訳にはいかないだろ」

一樹は、ビールの入ったグラスを持ち上げ口をつける。

「そう……明後日は何時に帰ってくるの？」

一樹はビールを飲み干し、空になったグラスをテーブルに置くとため息をついた。

「まだ分からない。仕事の状況によるから」

少し不機嫌そうな顔をして、サーモンの刺身に箸を伸ばした。

一樹の予定を把握したがる、遥香の態度にうんざりしているように

見えた。

あの日以来、一樹の所在がわからないと、それだけで不安を感じる様になっていた。

それで、つい束縛する様な態度ばかりとってしまう。

初めのうちは、罪悪感からか、一樹も遥香を安心させる様に、ちゃんと答えてくれていた。

てもそれが続くうちに、だんだん面倒に感じて来ているようだった。

遥香にとっては忘れられない辛い出来事で、今でも心の傷は癒えないけれど、一樹にとってはもう過去の話になっているようだった。

翌朝一樹を見送った遥香は、どうしようもなく気持ちがざわついて、落ち着かない気持ちでいた。

（一樹は本当に出張なの？また浮気してるんじゃ）

自分でも嫌になるくらい、一樹の事を疑ってしまい、悪い事ばかり想像してしまう。

（確かめたい……でも……）

やり直すと決めたんだから一樹を信じないと。

そう自分に言い聞かせながらも、確かめたい思いとの間で気持ちが揺れていた。

家事をしながらも、その事が頭から離れず、午後になるとついに、

電話の受話器を持ち上げ、ためらいながらも番号を押していた。

ドキドキとしながら、相手が出るのを待つ。

かけた番号は一樹の会社の直通番号だった。

もし出張が嘘だったら、一樹が出るかもしれない。

不在でも、アシスタントの女性が出るだろうから、さり気なく予定を聞けばいい。

後ろめたさを感じながら呼び出し音を聞いていると、

「ＮＡ開発でございます」

高い女性の声が聞こえてきた。

「あの、須藤一樹の家の者ですが……」

一樹がいなかった事にホッとしながら、電話の相手に告げると、

「あれ、遥香さん？」

甲高い女性の声が遥香の言葉を遮った。

「え……あの……」

「あっ私、前田です、前田美紀。遥香さんお久しぶりです」

戸惑う遥香に美紀は明るい声を出す。遥香は少し考えて、その声の持ち主を思い出した。

「美紀ちゃん？　久しぶり。営業部に異動になってたのね」

美紀は遥香の後輩だった。

短大も一緒、配属先も同じ総務部ということもあって、遥香はよく面倒を見ていて、仕事帰りに一緒に食事をする事もあった。「あっ、はいそうなんです。先月から異動になって……須藤さんに聞いてませんか？」

「うん、一樹は特に言ってなかったから」

「そうなんですか、そういえば今日はどうしたんですか？」

「あの……今日の一樹の予定を知りたくて」

「予定ですか？えっと京都に出張ですけど」

不思議そうな声を出す美紀の言葉に、遥香はホッと息をつく。

（良かった、本当に出張だったんだ）

安心したら、こそこそ予定を調べた自分が恥ずかしくなった

一樹に、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

そんな遥香の様子を知るはずもなく、美紀は言葉を続けてきた。

「遥香さん体の調子はもう大丈夫なんですか？」

「……体ってなんのこと？」

美紀の言ってる意味がわからず、遥香は小首を傾げて言った。

「え？　須藤さんがそう言ってたから……この間のバーベキューも遥香さんはそれで来れなかったんですよね？」「一樹がそう言ったの？」

なぜ一樹はそんな事を言ったのだろう。

話が見えず遥香は戸惑う。

「そうですよ、私バーベキューに遥香さんが来ると思ってたから、久しぶりにいろいろ話したいと思ってたんです。でも須藤さん一人で来たから、どうして来ないのか聞いたんですよ。そしたら具合が悪いから家で休んでるって……」

「え……一樹はバーベキューに参加したの？」

美紀の言葉に心臓を掴まれたような衝撃を受け、遥香は震えた声を出した。

「はい、来ましたよ。途中で帰ったみたいだけど……遥香さん、もしかして知らなかったんですか？」

不穏な気配を感じたのか、美紀は声のトーンを落とした。

「あっ……あまり詳しい事は聞いてなかったの。楽しみにしてたのに行けなくて残念だったから、一樹も気を使って言わなかったのかも」

「そうだったんですか～私、まずい事言ったのかと焦っちゃいました」

咄嗟にごまかした遥香の言葉に、美紀はほっとした声で言った。思い返してみれば、遥香がバーベキューの話をした時、一樹はどこか様子がおかしかった気がする。

（でもどうして私にバーベキューの事黙ってたの？　どうして一人で行ったの？）

「……美紀ちゃん、その時一樹は誰かと一緒じゃなかった？」

もしかして、その頃付き合っていた女性を連れていったのかもしれないと思った。

「いえ、一人でしたよ」

（それならどうして、私に嘘をつくの？）

一樹が何を考えているのか分からない。

以前迄は一樹を誰よりも近くに感じていたのに、今はとても遠く感じる……自分の夫なのに。

「あっ！　でも、須藤さんずーっと門脇さんと一緒にいましたよ」
美紀が大事な事を思い出したとでもいうように、一際大きな声を上げた。
「有里と？」
遥香は美紀の言葉に眉をひそめた。
門脇有里は、遥香と一樹の同期で役員秘書を勤めている。
年は遥香の2歳上。一樹と同じ年だった。
どちらかといえばおっとりした性格の遥香と、自分の意見をはっきりと口にする有里は、性格は反対なのになぜか気が合い同期の中で最も親しくしていた。
でも一樹とはそこまで、親しくなかったはずだった。
いつの間に、それ程仲良くなったのだろう。
一樹は何も言っていなかった。
有里の事を気にしながら、遥香は口を開いた。
「美紀ちゃん仕事中なのにごめんね、話し込んじゃって」
「大丈夫ですよーみんな外出してるし、今日は結構暇なんです」

電話も全然鳴らないし、と美紀は続ける。

そして遥香が、そろそろ電話を切ろうかと思った時に美紀の言った言葉は、遥香に更なる衝撃を与えた。

「そうだ、さっき言い忘れましたけど、須藤さん今日は遅くなるかもです。帰社予定が２０時になってます」

「一樹の出張は泊まりじゃないの？」

信じられない思いで問いかける。

「え？はい、夕方には向こうでの仕事終わるみたいです。部長と一緒だから一度会社に戻るそうです」

「……そうなの、ありがとう、教えてくれて」

混乱しながら、なんとか美紀に礼を言い、挨拶もそこそこに電話を切った。

美紀に変に思われたかもしれないけれど、取り繕う余裕が無かった。

遥香はふらふらとソファー迄行き倒れるように座り込んだ。

一樹は今日帰って来ない。

出張が日帰りならどこに泊まるというのか…考えるまでも無かった。

（まだ、続いていた…別れてなかった…一樹はずっと嘘をついていた！）

遥香はこみ上げる怒りに耐えるように、ギュッと手を握り締めた。
頭がクラクラして気分が悪い。
一樹が許せなかった。
遥香がやり直すよう努力している時も一樹は裏切りを続けていた。
遥香は大きく息を吐き、自分を落ち着かせようと努力した。
じっと一点を見つめたまま長い事考えて続けていたけれど、やがて立ち上がり、バスルームへ向かって行った。
知ってしまった以上、黙って一樹の帰りを待つ事は出来ないと思った。
（一樹に会いに行こう。相手の人が一緒なら、別れるようにお願いしてこよう）
遥香は化粧をし、着替えると、既に薄暗くなった駅迄の道を急ぎ歩いていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4837ba/

想いの行方

2012年1月14日01時50分発行